

下克上

にわとりとり



○

僕は、その友達を【ヘル君】と呼び、その子は僕を【デイ】と呼んだ。

「だって、僕らおんなじ名前なんでもん」

クスクスと、受話器の向こうで笑う彼は、どこか楽しげだった。

「ヘルパーのワドルデイと、水兵のワドルデイ……二人とも同じ、ワドルデイ。間違えちゃったらいけないからね」

その子と話すのは、いつも夜だった。どうして？ と一度訊くと、

「昼間は仕事があるからね」

そう、苦しそうな声が返るものだから、僕はそれ以上何も尋ねられなかった。

だけど、いつもの彼はもっと明るい。僕は小さな電話を抱えて寝床に潜り込み、毎晩彼と寝付くまでお喋りをする。おやすみも言えないまま、いつの間にか夢に落ちていく。小さな電話の僅かな電波が、僕と彼とを繋ぐ唯一の絆であったし、それだけで十分だった。オレンジオーシャンの黄金色の陽が暮れて、海に漆黒の帯がいくつも生まれる時間は、一日で一番楽しいお喋りの時間だ。だって、上司のメタナイト様はこわいし、艦長さんは厳しいし……毎日へとへとになるまで働いていたら、いつの間にか心が疲れてしまっていた。それを、ヘル君の笑い声は、優しく解きほぐしてくれる……。

「それでね、メイスさんが隠してたお菓子を、ジャベリンさんが食べちゃってね……」

「へえ……僕の中でも昔、似たようなことがあったよ。バグジーがさあ、ナックルジョーに内緒でね……あれは笑えたなあ」

話しても話しても終わらない、二人だけの秘密のお喋り。

ピンク色の小さな携帯通信機を握りしめて、波の音を聞きながら、いつまでだって喋っている。

この電話を、今まで使うチャンスはなかった。昔プブランドで流行っていた時、どうしても買えなくて、最近ようやく古いのを手に入れて……それでも、一緒にお喋りできる人がいなくて。とても寂しかった……。

だからかな。彼と出逢って、こうして友達になってからは、今までの寂しさを穴埋めするみたいに、たくさんの言葉を交換した。

そんな時だったんだ。ヘル君の口から、こんな単語を聞いたのも。

「下克上、しようよ」

「へ？」

ゲコクジョウ。

その言葉の意味が分からなくて、僕は思わず聞き返す。普段、絶対、使わない言葉だよ。

「下克上。上司をさ、裏切るんだよ。それで僕らがトップになるんだ」